「WRITING 指導」の展望

英語教育部　　田島　祐規子

２４年にわたる高校での英語教師経験を終えて、2004 年度から横浜国立大学の大学教員として再出発しました。着任先は「大学教育総合センター英語教育部」で、横浜国立大学の 4 学部のそれぞれの教養教育における英語教育を縦断的・全学的に管理運営するという部署でした。英語教員として各学部の 1 年生と 2 年生の英語授業を担当とし、授業に加えて、履修登録作業・履修相談・1 年生の英語統一テスト実施などを含む英語教育全般に関わる学内業務をこなしてきました。2013 年度から所属部署が「国際戦略機構」という名称に変更になりましたが、担当する授業、学内業務の内容は、そのまま継続されています。着任から 5 年くらいの間は毎日の仕事と大学特有の仕事環境に慣れることに試行錯誤の連続で毎日が精一杯でしたが、少しずつ自分の研究活動にも取り組めるようになってきました。

現在、関東圏の他大学の先生方と研究グループを作り、大学生の英語基礎力に関する共同研究を行っています。その研究結果の一部として、本学生については、概ね英語基礎力はあると評価されるものの、より強化すべき基礎力の一つが英語の多読力（大量の英文を言っていの速度で読み続けられるスタミナ）であることが分かりました。そのために、2010 年度末に英語教育部教員が仕事をする場所の近くに多読用文庫(Graded readers)を設置しました。多読本の借り出しは年々増えていて、それに合わせて文庫の拡大と充実を図っています。国大生については、テスト勉強のために英文を読むという「学習目的の reading」から、本当の読書、つまり自分の英語力と嗜好にあった「楽しむための reading」の経験値を在学中に大いに高めてもらいたいと願っています。英語教育部の多読文庫がそのきっかけになることを期待しています。

授業指導についての現在の最大関心事は writing です。留学すると reading 課題が恐ろしく大変という話を米国留学前によく聞かされましたが、実際に何よりも大変だったのは writing でした。自分が受けてきた英語教育の中では、文単位での英作文はやったことが

あっても、文章を書き出すwritingについて指導を受けたことはありませんでした。日本の中等英語教育の現場では、この英作文さえ充分に指導されなかった時期もあったかと思います。例えば、1987年にJET program （日本人教師と英語母語話者講師とのテイームテイーチング）が開始されて以来、英語会話を重点に置くオーラルコミュニケションが教室に華やかに登場しました。英語の文法学習は疎外され、文法の勉強＝英作文という構図から、英作文練習でさえ教室では影が薄くなったことを高校教師時代に経験しています。しかし、留学をした場合、英文レポート(English essay)がまともに書けなければ成績が悪くなるばかりが、生き残ることはできません。多くの日本人学生が海外の大学に出ていく時代になっていることを考えると、大学生には英文ライテイングに関する基礎知識と書く練習が英語力を支えるものとして絶対に必要であると考えます。このことから、1年生のライテイング授業を担当するときには、ＰＣを使った英文課題レポート規定の基礎知識から段階的に学習を進めていき、最終的に４~５パラグラフのshort essayが書けることを目指すようにしています。writingは私自身にとっても課題スキルなので、自分自身が英語学習者として地道に学びながら研究活動につなげていきたいと考えています。

担当する１年生用writing授業指導の一つとして、独自に開発したwritingプロジェクトを春学期あるいは秋学期の何れかで実施しています。これは、メールプロジェクトと名前をつけているもので、日本語クラスを受講している米国の大学生と英語writingクラスの国大生がメールのやりとりから初めて、最後にそれぞれの授業課題レポートを母語話者として添削しあうプロジェクトです。2009年度から始めて、2013年度で5回目の実施となりました。来年度の秋学期にも実施予定です。このプロジェクトの醍醐味は、「学習言語をコミュニケーションのために実際に使う」ということです。同時に、日米の大学生が双方ともにアカデミックなwriting課題を母語話者として添削するという経験です。この経験を通して、参加したほとんどすべての国大生が、母語である日本語の難しさを指摘しています。自分たちの母語である日本語を、外国人にとっての「学習言語」という視点で再認識することに大きな刺激を受けるようです。

日本人の学生が英語の文章を書く時に、意識的・無意識的にどのような方法を取ってwritingしているのかなど、writingについての興味は尽きません。今後の展望として、日本語の文章、英語の文章がそれぞれに有する情報構造についての学問的認識を高め、自分

らしい研究課題を見つけ、最終的には授業指導に反映できるようにしたいと希望しています。